



Stained canvas

長谷川 正美

油彩、キャンバス

この作品は、ステンドグラスとモザイクタイルをモチーフに、心象を表現しようと描き始めました。

しかし「垂直・水平の平行線と四角形の集合」を、持続的に繰り返し描く行為に没頭していくうちに、私の意識からモチーフと心象は消えていきました。そして、キャンバスにはそれらの残像と「垂直・水平の平行線と四角形の集合」が相俟って、何やら不確かな像が結ばれているように感じ、興奮を覚えました。この体験をきっかけに、現在も同じ手法を繰り返し描き続けています。

繰り返すのは、単調で坦々とした機械的な制作をすることで、心身機能の狂いから生じる手跡やズレ、誤配色など様々な失敗が造形に思いもよらない影響を及ぼし、そうして絵の密度が上がっていく様子が面白いからです。このようなヒューマンエラーが作り出すイレギュラーな造形に強く関心を抱くのは、私の意識の深部にある「身体観」が原因と思われ、したがって、これが私の制作の内容を方向付け、具体化させるテーマと言えます。

同じ手法を繰り返し、そこで得た気づきを再び同じ手法に取り込むといった循環する制作スタイルから、それまでとは違う表現の何かを探究したいと思っています。